

### 【第30話】壊れるまでえっちします

普通、初夜と言ったら嬉し恥ずかし二人きり、らぶらぶでやりくりなのではないだろうか。目の前にいる二人を交互に見比べて洋子はそんなことを考えた。まだろくに身動きが出来ない結衣は、リクライニング出来る台に横たわって洋子を睨んでいる。かと思うと陵は物言いたげな顔をして腕組みをし、洋子に助けを求めるような視線を送ってくる。

『陵くんが淫魔って、いったい、どういうことなんですか！？』

ヒューマノイド間での通話システムを介し、結衣が大声で怒鳴る。洋子は頭を押さえて顔をしかめた。

「結衣ちゃん、それで怒鳴られると、すごーく頭に響くからやめて。ちゃんと話すから」

「俺、説明が下手で……ごめん」

困ったような顔をした陵がぺこりと頭を下げる。洋子は渋い顔で陵を見つめてからため息を吐いた。二人の様子は天井につけたカメラで覗いてはいた。だがまさか自分が説明役に引っ張り出されるとは思ってなかった。

「陵くんが謝る必要なんて無いからっ！」

厳しい顔をした結衣がやけにきっぱりと言う。すると予想通り、陵が生真面目な顔をして首を振る。

「本当は俺がきちんと説明出来ればいいんだ。でも俺、説

明苦手だから、会長さんに頼めるなら頼みたいかなって」

だから、と言ってから陵が頷く。だが結衣は陵が謝ることに納得がいかないらしく、険しい顔をしたままだ。だがその感情の矛先はどうやら洋子にしか向けられていないようだ。そのことも洋子にははっきり判った。結衣は陵を責めている訳ではないのだ。

「あのね、結衣ちゃん、落ち着いて、話聞いてくれる？」

そう前置きしてから洋子は真顔で結衣を見つめた。すると結衣はぷくっと頬を膨らませつつも黙って頷いた。その仕草は結衣によく似合っていて可愛らしい。

「とりあえず、できるだけ手短に話すわよ」

深く息を吸ってから洋子はこれまでに起こった出来事を、要点をまとめて話して聞かせた。途中、何度か結衣が口を開きかけたが、結局は黙っていた。続いて洋子は陵に一度聞かせた魔の種類などについても話した。

「つまり、陵くんがヴァンパイアみたいな超自然的な存在かもしれないって、そういうことですか？」

洋子が話を終えた後、結衣が訝りの顔をして言う。

「そうそう、インキュバスとか……」

「インキュバスとヴァンパイアを一緒にしないでくださいっ！」

何故か結衣が勢いよく洋子の声を遮る。洋子は眉を寄せて結衣を見やった。その隣に立つ陵が怪訝そうな顔をして

結衣を見る。

「何かまずいのか？」

「だって、ヴァンパイアはかっこいいしっ！」

力のこもった声で結衣が言う。すると陵が困ったような顔をして首を捻る。

「そうかなあ……。どっちもどっちの気がするけど。ていうか、ヴァンパイアって血を吸うんだよな？ インキュバスって？ ゲームとかに出てくる奴？ エロいことしたりする」

考えるような顔をして陵が天井を仰いでみせる。話が急に妙な方向に逸れて洋子は口を噤んだ。どうやら二人だけの会話に入ってしまったらしい。

「天魔往生シリーズだと、ヴァンパイアはすごくかっこいいんだもん。インキュバスは使えなくて情けなくて弱いけど」

「え？ あれ、けっこうインキュバス使えるじゃん。俺はヴァンパイアよりインキュバスのが使いやすくて好きだったけどな」

二人は共通のゲームか何かの話題で盛り上がっているようだ。そのことは判るのだが、洋子には残念なことに該当ゲームの知識がないため、口を挟む余地もなかった。というか、さっきまでの結衣の怒りは一体どこにいったのだろうか。

「ヴァンパイアは弱点あるけど、ジュエル使って強化すれ

ばいいし、中盤で仲魔になっても、ラスボスまで一緒に行けるし」

何よりもグラフィックがかっこいいし。結衣がそう力説すると陵がえー、と不満顔をして首を捻る。

「それよりインキュバスののがいいって。裏ルート使えば女モンス落とせるし。かっこいいっていうのはよく判らないなあ……あれ、そんなにかっこいい？」

真面目な顔をして陵が言う。前から思っていたのだが、陵の美的感覚には多少、難があるような気がする。洋子は二人の会話を聞きながらそのことはとりあえず黙っておいた。

「陵くん男主人公でしかやってないでしょ？ 女主人公でやると、ダークサイドのパートナーがヴァンパイアで、すごく感動するストーリー展開なんだもん」

「え、女主人公やるのはキモい。ちょっとやってみただけど、あれ、野郎ががんがんなンパしてくるし、そもそも女主人公の造形が好きじゃない」

弾んだ声で結衣が言うのに対し、陵が渋い顔をして言い返す。

「そういえば、陵くんに似てるかも！ ってごめんなさい」

慌てたように言って結衣が頭を下げる。すると陵が不思議そうな顔になる。

「え？ 似てないよ。男主人公の方は……ちょっと……蘭兄に似てるかもとか思ったけど」

そう言って今度は陵が少し頬を赤くして目を泳がせる。

「結局、陵くんのお兄さんってどういう意図で動いてるの？」

ふと気付いたように結衣が言う。どうやらようやく会話がゲーム世界から現実に戻ってきたようだ。そのことに内心で安堵の息を吐いて洋子は話に割って入った。

「だから、綾ちゃんが完全に変化しちゃうのを放っておくのもバクチだし、とりあえず現状を維持したほうがいいからって維持してるんだと思う。結衣ちゃんだって綾ちゃんが女の子になっちゃったら困るでしょう？」

洋子が言葉を継ぐと、結衣がちょっと眉を寄せて渋い顔をする。

「それは、陵くんが自分で判断することだと思う。何も言わないで勝手にするのはやっぱり良くないと思う」

「あー……俺は蘭兄のすることならいいかなとか」

首を傾げた陵がけろりとした顔をして言う。少し前までは蘭に対して物騒なことを思っていたはずなのに、随分な変わり様だ。きっと誤解が解けたからに違いない。洋子は内心、ほっとしながら結衣を見やった。

「ってあなたのマスター様はそう仰ってますよー。結衣ちゃん、まだ何か言いたいことある？」

微笑みを浮かべて洋子は結衣に声を掛けた。不満そうな顔をしつつも、結衣が首を横に振る。

「陵くんが良いなら、あたしは従うだけです……」

「ま、もし何かむかついたことしたら殴るし。今のところはいいと思うんだけど、もしかして結衣、気に食わない？」

陵が少し不安そうな顔をして結衣を見る。結衣の表情はさっきまでの不満から、今度は怯えるようなものへと変化している。

「なんだか、怖かったの。なんて言ったらいいのかな……。未知なる存在への恐怖？ そんな感じ……？」

「怖い？ うーん。蘭兄が怖い……うーん」

考えるような顔をして陵が腕組みをする。聞くところによるとどうやら結衣は蘭と面識があるようだ。まあ、シュークリームを陵と一緒に口にしたのだから、蘭と実際に会っているのは当然だろう。そんなことを考えて洋子は二人を見比べた。

「まあとりあえず、ランちゃんの話は良いじゃない。そう言えば結衣ちゃん、綾ちゃんの呼び方、大丈夫なの？ その呼び方で慣れちゃったら、間違えない？」

「あ、しまった。そっか、俺、女装で入学するんだった……」

洋子の指摘に陵が真っ先に反応し、ぶつぶつと口の中で呟く。どうやら立て込んでいたために、女として入学するというのをまた忘れていたようだ。だが容姿だけなら本人が意識しようがどうだろうが、陵は美少女にしか見えないのだから問題はないだろう。

「陵く……いえ、あのっ！ どう呼べばいい？」

急に不安そうな顔になった結衣が問いかける。すると陵がうん、と頷いて言う。

「じゃあ、綾で。って、そっか。呼び方変えるのも指示して……うっ」

ヒューマノイドが機械だということを思い出したのか、陵が眉を寄せて軽く呻く。

「綾って、呼び捨てでため口でいいの？ 敬語とか、使わないとだめなんじゃ？」

ビデオで見せてもらった会長は、すごくしおらしく敬語で喋ってたし。そんなことを結衣が続ける。洋子は以前に結衣に見せたビデオのことだと気付いて納得した。

不意に低い声で呻いた陵が急に結衣の乗っていた台に覆い被さる。慌ただしい手つきでペニスを引っ張り出しつつ陵が声を張り上げる。

「呼び捨てタメ口でオッケー！ それで、結衣！ していい！？」

興奮して叫ぶ陵。それとは対照的に冷静な口調で洋子が結衣に言う。

「そうよ。結衣ちゃん。さっさと始めないと、あなた、もう限界でしょう？」

ふと気付いて洋子は結衣に声を掛けた。結衣が慌てたよ

うに陵と洋子とを見比べる。

「限界って……あっ……」

か細い声を漏らした結衣が頬を染めて荒い息を吐く。ヒューマノイドは初めて起動してすぐは性的快樂のインプットをしまくらなければならないのだ。

「うっ、モーター回ってる音が、くっ、入れるよ？」

結衣の下腹部から聞こえる音に反応したのか、陵が慌ただしく言って結衣の乗る台をつかみ、腰を押し出す。

「えっとお。それで、私はここで見てていいわけ？」

のんびりとした口調で洋子が問うと、陵が何度も頷く。

「結衣ちゃんは？」

「綾の……指示に従い……ます、んっ！　そこっ！」

洋子の問い掛けに結衣が懸命な面持ちで答える。結衣に覆い被さって身を震わせた陵が洋子を見つめ、小声で言う。

「も、もしかして、見るの、嫌？　とか？」

「ここに居なくてもカメラで監視しないとトラブル対処できないし。っていうか、そばにいたらうざくない？」

普通はこういう時は形だけでも二人きりになりたいものではないのだろうか。少し心配になりつつ洋子が訊ねると、意外にも陵が首を横に振る。

「俺、慣れてないし、会長さんなら、見られても、いいか



な、とか」

ゆっくりと腰を引きながら陵が途切れ途切れに言う。結衣の身体に腕を回した陵はおっかなびっくりの態で腰を揺すり始めた。

「あっ、こんな身体が勝手に反応して、んっ！　すごっ！  
綾っ！　いいのっ！」

結衣が甘えた声を上げて何度も頷く。どうやら直に見えても問題はなさそうだ。洋子は交わる二人の傍に椅子を引っ張ってきて腰を下ろした。

「こ、こう？　かな？　って、これヤバイよ、すぐ出るかも」

「んっ！　大丈夫っ！　出したら、吸うからっ！　あああ  
んっ！」

結衣が喘ぎ混じりに言った直後、陵が呻きを漏らして腰を勢いよく動かし始める。洋子は交わる二人の様をじっと見つめ、足を組み合わせた。昂奮した顔をして陵が懸命に腰を振るたびに、結衣の人工の愛液が音を立てる。

『会長さんっ！　あのっ！　変なんですっ！　あそこの音がすごく大きく聞こえてっ！』

急に洋子の頭の中に結衣の声が聞こえてくる。ヒューマノイド専用の通信システムを介して聞こえた声に洋子はびくんと身を竦めた。つつい熱心に二人の様を眺めていた洋子は慌てて結衣を見やった。

『それって普通だから。メカクリの下にマイクついてるの

知ってるわよね？』

洋子は通信を使って結衣にそう教えた。そうしている間にも、陵が荒い息を吐きながら腰を振り立てる。

『はい、ありがとうございます……』

急に結衣の通信の声が切れた直後、今度は洋子の耳に結衣の激しい喘ぎ声が届いた。

「あああんっ！」

「結衣、ファン、回して！ 俺、もう……」

勢いよく腰を揺すりながら陵が上ずった声で言う。

『あっ、あのっ！ ファンの回し方をっ』

焦ったような声が洋子の頭の中に響く。よく考えたら結衣はまだヒューマノイドとして目覚めたばかりで、機体のことは何も知らない状態なのだ。

「綾ちゃん。ファンの強制回転はファンの横のスライドスイッチをずらして」

「うっ、うん、判った」

頷きながら返事をした陵が、少し身を起こして結衣の恥丘に手を這わせる。その後、結衣の下腹部からファンの回る音が鳴った。

「うっ、出る！」

低い声で言った陵が結衣の乳房をつかみ、腰を素早く前

後に揺する。

「あっ！ 綾っ！ あやあっ！ 好きっ！ 好きなのっ！」

悲鳴に近い声で言って結衣が首を力なく振る。がくがくと頷いた陵が身を伏せて結衣の唇を塞ぐ。唇を合わせたまま陵が呻いて腰の動きを止め、身体を震わせる。乱れた息を吐きながらのろのろと身体を起こした陵が、ええと、と呟きながら結衣の乳首を操作し始める。どうやら射精したらしい。

「……会長さん……」

乳首の部品を指先で回しつつ、陵が唐突に洋子を呼ぶ。二人の様に見入っていた洋子はその声にはっと我に返った。

「綾ちゃん、どうしたの？」

「俺は……重大な問題に気が付いた……」

陵が結衣の胸元から手を離して呟くように言う。

「何かトラブルでも？」

もしかして何事か、見えないところで起こったのだろうか。だが結衣は快感を得てうっとりとした顔をしているだけのように見える。特に痛がってもいなかったから、機体内部が破損などもしていないだろう。

「セックスしてると結衣のあそこが見えない！」

洋子を見つめて陵がこぶしを握り固めて叫ぶ。思わず洋

子は頭を抱えた。

～立ち読み版はここまでです～